

地盤工学会におけるダイバーシティの実現

Promotion of Gender Equality and Diversity Management in the Japanese Geotechnical Society

田中真弓 (たなか まゆみ)

男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会 委員, 鹿島建設(株) 課長代理

1. はじめに

地盤工学研究発表会では、男女共同参画およびダイバーシティに関する特別セッションを2005年以来継続して実施している。2010年からは、“地域に根ざしたダイバーシティ”という副題のもと、研究発表会開催地で活躍していただいている方々を中心に話題提供していただいている。13回目となる本年は、中部地方で活躍されている女性・外国籍・ベテランの方に講演いただいた。本セッションは、地盤工学会会員以外の方も無料で参加できる「一般公開」の行事として実施している。毎年、学会員以外の方にもご参加いただき、活発な意見交換を行う貴重な場となっている。

2. セッションの概要

特別セッションは、大会初日の2017年7月12日午後に行われた。参加者総数は約50名である。参加者に対して実施したアンケート調査によると、男女比は男性の方が多く4:1で、20代から60代以上の幅広い年齢層の方にご参加いただいた。以下に各講演の内容と討議・意見交換の様子について記す。

2.1 ダイバーシティ推進のさきにあるもの

まず、男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会委員長の片岡沙都紀氏(神戸大学)から、当委員会の活動方針・活動内容について説明があった。地盤工学会では、性別や国籍、年齢にかかわらず多様な人材が活躍できる魅力ある学会を目指して、2003年からダイバーシティ推進に関する活動に取り組んでいる。多様な人材の宝庫である学会が率先してダイバーシティを推進していくべきという考えから、当委員会は、学会員同士の情報交換の場の提供を積極的に行っている。具体的には、研究発表会における「サロン・土・カフェW」の開催、若手や世代間交流を目的とした「座談会」の開催、次世代育成のための女子中高生夏の学校への参加、学会のホームページを介した情報発信を紹介した。また、地盤工学会誌2015年7月号特集「ダイバーシティ推進のさきにあるもの」¹⁾で行



写真-1 片岡沙都紀氏

った技術者紹介は大変好評であったため、2017年1月からはWeb技術者・研究者紹介をスタートさせ、今後も継続する予定である。さらに、会員からのニーズに合致した技術向上や情報交換の新しい仕組みとして「メンター制度」の試行なども検討している。

2.2 地方でゆるっとダイバーシティ

長野市で自宅を事務所としてあおば技術士事務所を開業した佐野理氏には、出産を機に前職を退職し、起業した経緯をご紹介いただいた。

学生時代は実家のある名古屋での就職・結婚を漠然と考えていた佐野氏だが、結婚前はコンサルタント会社の関東の本社に勤務していた。結婚後、自宅のある長野市の支店に5年勤務し、その後第2子出産前に退職された。コンサルタント会社では、主にトンネル、斜面、堰堤等の数値解析業務に携わり、起業後は、当時の仕事で培った技術を生かして業務を行っている。現在は、土木設計中心のコンサルタント業務を行っており、応力変形解析などの数値解析やデータ解析などを中心に受注されている。5年前に長野市から伊那市へ転居され、地方都市で働くデメリットとして、地元で仕事が少ない、都市部まで行くのに時間がかかる、ということ挙げられた。一方、メリットとしては、保育園の確保が容易、自家用車での通勤が容易などを挙げられ、いろいろな職場でテレワーク、在宅勤務などの制度が整いつつあることから、地方で仕事を続ける選択肢も増えていくのではないかと述べられた。佐野氏が会社を辞めた理由は、実家から遠く親族のサポートが受けられない環境での子育てや、転勤で居住地が変わる可能性が今後も大きい事情から、毎日決められた場所で決められた時間勤務するという会社のルールの中で果たして仕事が続けられるだろうか、と不安になったことだった。仕事を長く続けたい、という想いがあれば、「職場を離れる」=「仕事を辞める」ではない、いろいろな選択肢も視野に入れながらキャリアメイクをすることもありえる、と若手技術者への力強いメッセージも語っていただいた。



写真-2 佐野理氏

2.3 夢への道のり ~研究者・外国人・女性として~

河川構造物の浸透安全性やトンネルの力学挙動の研究をされてい

る、中国出身の横浜国立大学、崔 瑛氏には、研究者を目指した幼少期の想いから、外国人・女性ということを意識せずに過ごしてきたという日本での13年間の研究生活などについてお話しいただいた。



崔氏は、北京まで列車で24時間かかるという黒龍江省に生まれ、小さい頃から負けず嫌いで、キュリー夫人に憧れを抱いていた。先生→科学

者→博士と夢は膨らみ、勉強すれば何とかなる、北京にいれば何とかなる、と努力され、北京の清華大学に入学された。卒業後は京都大学大学院に進まれ、摂南大学で教育に携わりながら博士を取得された。その後、名城大学、横浜国立大学に勤められ、現在、4歳のお子さんを持つ。中国にいるときから、「言語を仕事の唯一の道具としない」を心掛け、研究能力を評価してもらいたいと来日。ところが、外国人・女性としての立場が目立され、そのせいで外国語関係の業務や女子学生のケアなどを任せられた。子育ても始まり、自分がやってきた研究の能力が発揮できないと悩んだ時期もあったが、崔氏は「世界を視野にいれたら外国人は存在しない」、女性としての「配慮に甘えない」と前向きに意識を変えることによって、乗り越えてこられた。組織のグローバル化は外国人に頼るべきでない、と日本人にとっては厳しいがもっともな感想も述べられた。最後に、自分は研究者であるので、外国人・女性ということではなく「研究」そのものの内容、インパクトで評価を受けたい、もちろん苦労もあると思うが「すべては夢に通じる道りにある景色」と結ばれた。

2.4 超音波振動薬液注入工法開発の発想から完成まで

人材開発支援機構の野口好夫氏には、早期退職後の新しい薬液注入工法の開発への精力的な取り組みの様子とその行動力の源について語っていただいた。

野口氏は、永らく名古屋市の道路建設に携わってこられたが、55歳の時に早期退職し、翌年には人材開発支援機構を設立され、代表取締役役に就任された。かねてからやりたいと思っていた超音波振動を用いた薬液注入工法の開発に着手され、現場で生まれたアイデアの実現に向けて邁進されている。特許取得、共同開発者探し、資金獲得、さらに実機製作までを短期間で実現できたのは、野口氏の熱意が求心力となった“チーム力”にあるのではないだろうか。野口氏自身は、工程管理がうまくいったことと、野口氏より高齢の注入



写真-4 野口好夫氏

技術者をはじめ、メンバーの協力ややる気を他のメンバーが感じられたことが成功の原因と分析している。このように、共同研究開発は核となる人物が必要、と結ばれた。野口氏の講演では、おもしろそう！、楽しそう！が、行動を起

こすきっかけになっており、それを実現するために粘り強く取り組むことが、研究者・技術者に重要ということがよく伝わってきた。

2.5 討議・意見交換

今回は、前回に引き続き、外国籍の方にご講演いただいた。会場には複数の外国籍の方が参加され、海外からの研究者・技術者が日本でどのような生活をし、仕事に取り組んでいるかということへの関心の高さがうかがえた。討議の時間には、地方で起業されている佐野氏から、一人で仕事をしていると最新技術情報に触れる機会が減り、不安になるが、地盤工学会誌を読んで情報を得ているというお話があった。また、崔氏と野口氏からは、技術者としては技術力・熱意が男女関係なく大事で、自分にしかできないことを見つけていきたい、とコメントされた。さらに村上会長からは、ご自身の経験も踏まえて、夫婦共に仕事を持っている場合は、勤務形態や仕事の状況に合わせて育児・家事も含めた相互協力が必要とのコメントがあり、ワークだけでなくライフでも男女共働が重要であると感じた。



写真-5 質疑応答、討議の時の会場の様子

3. ダイバーシティ推進に向けて

ダイバーシティ委員会では、昨年度は恒例となっているイベントに加えて、Web 技術者・研究者紹介やメンター制度の検討などを行い、男女共同参画メインの活動から視野を広げ、性別・年齢・国籍に関係なく、会員の活躍を後押しするような情報提供や制度の検討を進めている。今年度は、外国籍の方を対象としたワールドカフェの実施や、メンター制度の試行にも取り組む予定である。地盤工学会では、今後も、様々な立場の方の個性を生かし、活躍するための情報や人と人とのつながりを築くための場の提供を積極的に行っていききたい。最後に、ダイバーシティ推進活動に協力いただける委員、サポーターは引き続き募集中である。学会への期待、不満、要望等も委員会宛にお寄せいただければ幸いである。

参考文献

1) 地盤工学会：地盤工学会誌，Vol.63，No.7，2015年7月号
特集：ダイバーシティ推進のさきにあるもの

https://www.jiban.or.jp/index.php?option=com_content&view=article&id=1752%3A2009-01-07-08-26-28&catid=101%3A2008-09-18-06-24-51&Itemid=285 (参照2016.10.3)

(原稿受理 2017.8.24)